

令和5年度 授業改善実践研究校報告書 湯来南小学校

1 学校の課題

令和5年度4月に実施した全国学力・学習状況調査とCRTの結果は次のとおりであった。

【全国学力・学習状況調査平均正答率】

全国学力	本校	県平均	全国平均
国語	54%	69%	67.2%
算数	46%	64%	62.5%

【2年生以上のCRT平均得点率と全国との比較】

CRT 国語	得点率 (%)	全国比 (全国=100)	CRT 算数	得点率 (%)	全国比 (全国=100)
知識	64	86	知識	63	82
思考	55	82	思考	39	66
態度	76	95	態度	75	93
平均	64.7	87.5	平均	59.1	80.5

全国学力・学習状況調査の結果では、国語、算数ともに国及び県の平均を大きく下回っている。また、2年生以上で実施したCRTでは、いずれの観点においても平均を下回っており、学力が十分に定着しているとは言い難い実態がある。さらに、学習内容の理解力やコミュニケーション能力等の課題を抱えている児童は、全体の約3割程度であり、どの学級においても個別の支援を要する児童が在籍している実態がある。

また、令和4年度の社会科の単元まとめテスト及び社会科に関する児童アンケートの結果は以下のとおりであった。

【社会科まとめテストの観点ごとの平均通過率】

R4社会科	3年	4年	5年	6年
知識・技能	86%	81%	83%	84%
思考・判断・表現	86%	90%	79%	80%
合計通過率	86%	86%	81%	82%

【社会科まとめテストの通過率ごとの児童割合】

R4社会科	3年	4年	5年	6年	平均
A(80%以上)	86%	86%	52%	64%	73%
B(80%未満60%以上)	9%	14%	48%	27%	25%
C(60%未満)	5%	0%	0%	9%	4%

【児童アンケート（令和4年度末実施）】

社会科アンケート結果 (R5.3月実施)	すき どちらかといえばすき	きらい どちらかといえばきらい
1 社会科の学習はすきですか？	68%	32%
2 社会科の学習で、教科書・資料集・タブレットで調べることはすきですか？	85%	15%
3 社会科の学習で、見学に行ったり、インタビューすることはすきですか？	86%	14%
4 社会科の学習で、調べたことを発表することはすきですか？	41%	59%
5 社会科の学習で、学習問題についてグループやクラスで話し合うことはすきですか？	80%	20%
6 社会科の学習で、学習問題について自分の考えを書くことはすきですか？	56%	44%

社会科においては、概ね学習内容が定着しているように見えるが、通過率80%以上の児童は、中学年と比べると高学年の方が少ない。また、児童アンケートの結果からは、調べたり、話し合ったりすることに対して肯定的な回答が多い一方で、社会科に対して意欲的でなかったり、考えを表現することについて苦手意識を持っている児童が多くなっていることが分かる。

そこで、本校の課題として、次の3つを取り上げることとする。

- (1) 基礎学力の定着に課題があり、個別の支援が必要な児童が各学級にいる。
- (2) 社会科に対する意欲が低く、一部の児童は肯定的に学習に参加できていない。
- (3) 調べたことを発表する意欲が低い。

2 研究主題

繋がり関わる中で、自らの考えを持ち、ともに高め合う児童の育成
～人の営みが見える社会科学習、ICT活用による協働的で深い学びを軸に～

3 取組内容

(1) 地域資源（人材・団体・自然・歴史・環境など）を生かした教材及び単元の開発

社会科は、身の回りにある社会的事象について学習する教科である。しかし、学習の中でそれらの社会的事象を自分事として捉え、実感することが難しい教科でもある。湯来町には、サゴタニ牧農やマルニ木工など多くの地域資源が存在する。本校では、それらを活用して教材及び単元を開発することで、児童が社会的事象を身近に捉え、意欲的に学ぼうとする姿を目指した。

【5年生の実践より】

第5学年「わたしたちの生活と工業生産」では、地域資源として湯来町にある家具メーカー「マルニ木工」を扱い、子どもたちがマルニ木工の工場見学をする場面を設定した。見学の中で実際に椅子に触ったり、腰かけたりすることで、各資料や動画だけでは理解できない、「手触り」や「座り心地」を実感できるようにした。



単元のまとめでは、マルニ木工の会長をゲストティーチャーとして迎え、マルニ木工の目指す家具のデザインや、HIROSHIMA アームチェアができるまでの苦労や努力について話を聞く場面を設定した。マルニ木工で働く人々の工夫や努力について、実際に働いている人から直接聞くことで、工業に携わる人々の工夫や思いについて触れることができるだけでなく、単元を通して学習してきたことを実感させることをねらった。

【4年生の実践より】

第4学年「地域の発展につくした人々」では、地域資源として「サゴタニ牧農」を扱い、地域の発展に尽くした人物として、湯来地区の酪農の発展に貢献した「久保政夫」を取り上げた。サゴタニ牧農が経営する牧場「久保アグリファーム」は、遠足で訪れる等、児童にとっても馴染みの深い場所であり、意欲的に学ぶ姿が見られた。また、単元の導入では、「サゴタニ牧農」の牛舎や牧草地等を見学することで、自分たちが普段飲んでいる牛乳がどのようにして作られているのかを実感できるようにした。



単元のまとめでは、サゴタニ牧農の副社長をゲストティーチャーとして迎え、サゴタニ牧農が目指している「完全放牧」の目的について話を聞いた。直接話を聞くことで、サゴタニ牧農の目指すビジョンを具体的に理解するとともに、地域の生産者の目指す将来像や乗り越えてきた苦労を知ること、学習への意欲を高めたり、湯来の将来像を自分事として捉えを考えたりすることにつながった。

(2) ICT 機器の効果的な活用

ICT 機器を効果的に活用することで、調べるだけでなく、調べたことや考えたことを発信したり、共有したりすることができ、学習を深めることができる。本校では、Google クラウドルームやジャムボード、ミライシードのオクリンクなどのアプリを中心に活用し、意欲的に調べたり、考えをまとめたりする姿を目指した。

【調べる場面における活用】

資料を用いて調べる場面においては、Google クラウドルームを活用した。写真や絵などの資料を手元で拡大し、細部まで読み取ることができるため、多くの気付きや考えを生み出すことへとつながった。また、加工した資料を提示したり、複数の資料から同時に読み取ったりすることが容易にできるため、学習問題解決に向けての資料の精選にもつながった。



↑ 第6学年「明治の国づくりを進めた人々」での活用例

【考えの共有場面における活用】



↑ 第6学年「今に伝わる室町文化」での活用例

考えを共有する場面においては、ジャムボードやオクリンクを活用した。一度に複数の考えを見たり、比べたりすることができ、考えを深めたり、共有の前後で考えが変容したりする様子が見られた。また、友達がどのような考えを持っているのか知ることができるため、考えを書くことが苦手な児童にとっては参考にしたり、考えに自信を持ったりすることにつながっていた。さらに、ジャムボードでは、考えを児童が容易に移動させることができるため、意見や考えを整理したり、キーワードごとにまとめて焦点化したりすることへとつながった。

(3) 社会科を中心とした授業改善

社会科で目指す資質・能力を育成するためには、日々の授業を充実させていくことが最も重要である。本校では、校内研修等を計画的に行うことで日々の授業改善を行い、授業力向上を図った。

【校内研修】

下記の日程により、計画的に校内研修会等を実施し、社会科を中心とした教材研究及び授業力向上に努めた。

4月	校内研修会①	社会科授業づくりに関する理論研修会 講師：広島市教育委員会指導第一課 石中指導主事
6月	校内授業研究会	第3学年「わたしたちのくらしと販売の仕事」
8月	校内研修会②	社会科授業づくりに関する理論研修会 講師：長崎大学准教授 新谷 和幸先生
9月	校内研修会③	公開研究会に向けた指導案検討会
10月	校内研修会④	公開研究会に向けた指導案検討会
11月	砂谷中学校区研究会	第6学年「町人の文化と新しい学問」
11月	研究指定校公開研究会	第4学年「地域の発展につくした人々」 ～推しのCOW 湯来の一番☆サゴタニ牧農～ 第5学年「わたしたちのくらしと工業生産」 ～100年経っても世界の定番～マルニ木工に見る工芸の工業化
1月	校内研修会⑤	令和5年度研究のまとめ

【チームによる授業研究】

全教員が4年生チームと5・6年生チームに分かれ、授業者のイメージ共有や単元開発のサポートを目的とした授業研究を公開研究会に向け、定期的に行った。本校は、全学年が単学級であることから、一人で授業づくりについて考えることが多かった。チームを組むことで、様々な考えを授業づくりに生かしたり、学習内容の系統性などについて考えるきっかけとなった。

**【板書意見交換会】**

ねらいを明確にした授業づくりを目指すため、クラスルーム上で普段の授業の板書やその授業の工夫や児童の反応などを共有できるようにした。また、意見交換会を開催することで、互いの授業の工夫を聞き合う機会となった。

**【教材及び掲示物等の作成】**

学習内容を身近に感じることができるよう、掲示物を作成し、学習の足跡が残るよう工夫した。また、文書資料の読み取りだけでは難しい内容については、スライドや紙芝居などを作成し、視覚的に理解できるようにした。



1 サゴタニ牧農についてまとめたもの



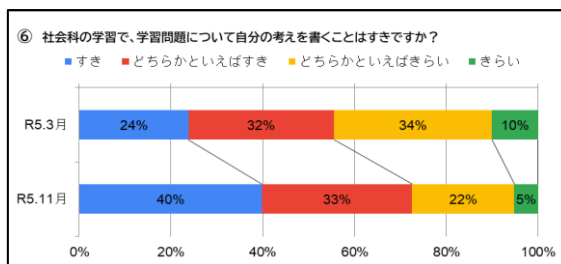
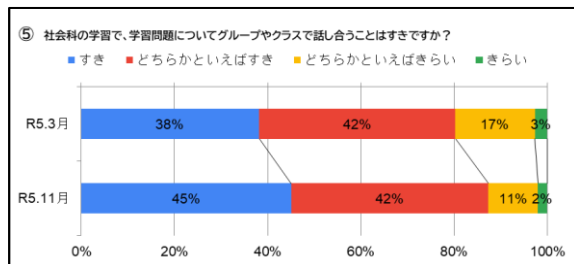
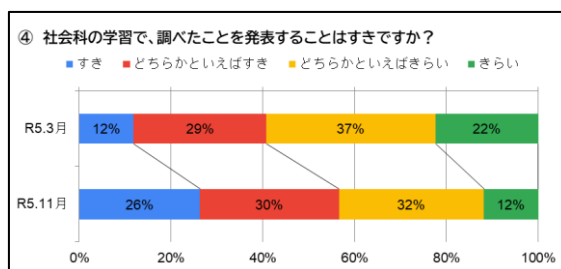
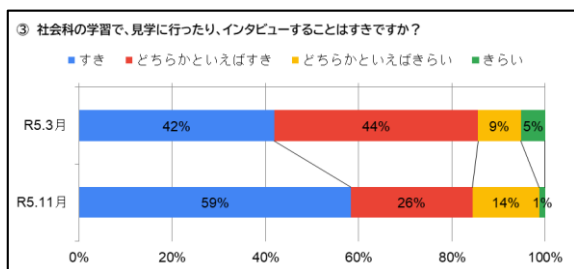
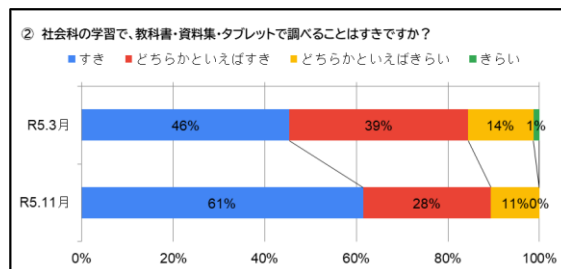
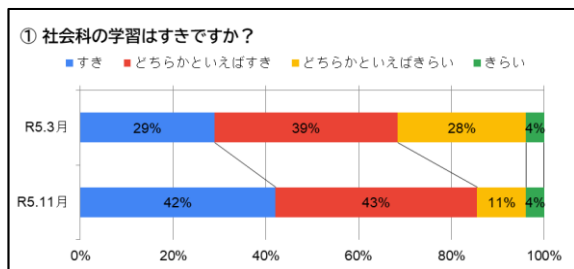
1 「サゴタニ牧農の歴史」を紙芝居化したもの



1 マルニの家具のデザインの変化についてまとめたもの

4 検証結果

(1) 児童アンケート



令和4年度末と比べると肯定的回答が増えている。特に本校の課題として挙げられていた社会科の学習に対する意欲については17%、発表への意欲については15%、自分の考えを書くことについては16%増えており、大きな変化が見られた。

(2) 社会科単元まとめテスト 昨年度との比較

【社会科単元のまとめテスト観点別平均通過率】

R4社会科	3年	4年	5年
知識・技能	86%	81%	83%
思考・判断・表現	86%	90%	79%
合計通過率	86%	86%	81%

R5社会科	3年	4年	5年	6年
知識・技能	68%	88%	89%	90%
思考・判断・表現	78%	87%	88%	84%
合計通過率	73%	88%	89%	87%

【社会科単元のまとめテスト通過率ごとの割合】

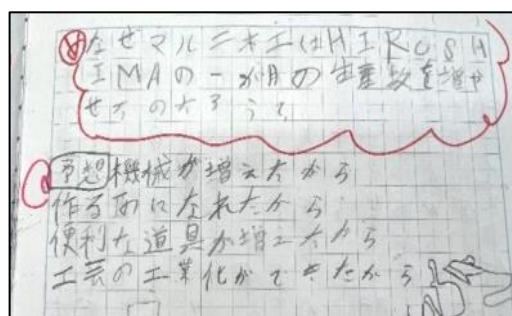
社会科まとめテスト	令和4年度末	令和5年度前期末	令和5年度学年末
A(80%以上)	72%	65%	69%
B(80%未満60%以上)	25%	30%	27%
C(60%未満)	3%	5%	4%

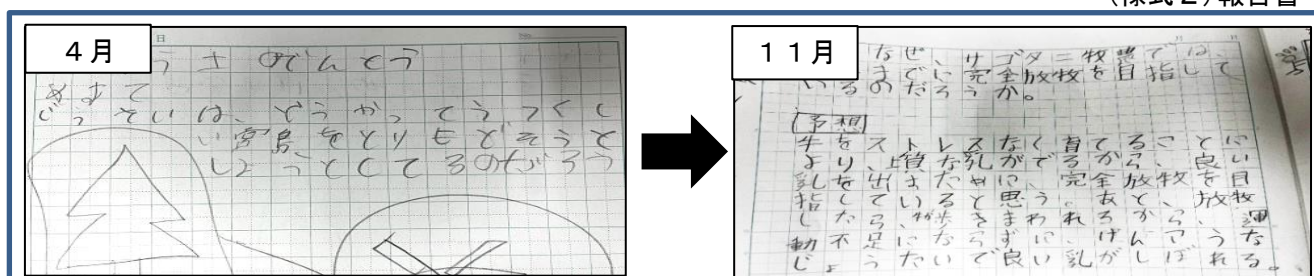
令和4年度末と比べると、4年生以上のすべての学年で通過率が上がっているが、3年生においては他の学年と比べて10%以上低い。また、通過率ごとの児童割合については、令和4年度からの変化はほとんどみられていない。

(3) 児童の変容（学習意欲・表現活動）についての教員の見取り

【自分の考えを持つことができる児童の増加】

右の写真は、マルニ木工が「HIROSHIMA」の生産量を増やすことができた理由について、5年生児童が予想した場面のノートである。機械の増加や道具の発展など、生産量の増加とそれらに関わる事象を関連付けて予想を書くことができている。多くの児童が考えを書くだけでなく、学習内容と自身の経験を関連付けながら考えを持つようになっている。



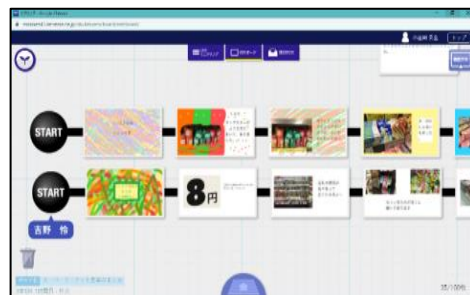


上の写真は、4年生児童の4月と11月のノートである。地域資源を活用した教材に対して、児童が意欲的に取り組み、予想をしたり、振り返ったりする際の文章量が増えている。また、学習する社会的事象についての気付きを現代や自分の生活と比べながら書くようになり、質も高まっている。

自分の考えを發表することが苦手であった児童については、オクリンクやジャムボードで自分の考えを表現する姿が見られるようになっている。



↑ マルニの目指す「世界の定番」について児童の考えを共有したもの



↑ スーパーマーケット見学で見つけた工夫をスライドにまとめ、オクリンクで共有したもの

5 研究成果

【成果】

① 社会科に対する興味・関心の高まり及び基礎的な学力の定着

昨年度末と比べて、社会科を好きと回答している児童が増えた。今年度、地域資源であるマルニ木工やサゴタニ牧農などを活用した単元開発を行ってきた。児童にとって身近な教材を扱うことが、社会的事象に対する興味・関心を高め、学びのきっかけにつながったと考えられる。また、問題解決型の授業展開や ICT 機器を活用した授業改善、児童のつまづきを想定した資料の作成や支援の工夫などにより、学習に見通しを持てたり、自分の力で課題解決に取り組んだりできるようになったことも社会科好きが増えた要因であると考えられる。さらに、そういった様々な社会的事象に対する興味・関心の高まりが、資料を読み取ったり、考えを表現したりする力の定着にもつながったと考える。

② 社会科を中心とした授業スキルの向上

チームでの単元開発やクラスルームを活用した授業記録の共有、ペアでの授業の流れや児童の反応についての振り返りなど、教員間で学び合う場を設けたことで、研究テーマに向けた取組の共通認識を図ることができただけでなく、それぞれの教員の授業づくりの視点や工夫などが共有され、日々の授業づくりに生かすことができた。また、ICT 機器を積極的に活用するために、提案授業や研修などを通じて授業イメージについても共有したことで、デジタルツールやオンライン教材等を効果的に取り入れた多様なスタイルの学習展開が可能となり、社会科だけでなく他教科においても実践されるようになった。

【課題】

① 各学年の実践等の引継ぎ

これまで、地域資源を活用した単元開発や児童のつまづきを想定した資料作成等を行ってきた。しかし、全学年が単学級であることも関係し、実践した授業を次年度以降に確実に引き継ぐことができていない実態があった。今年度は、チームを組むことである程度の共有はできているが、授業者のみにしか分からない情報も多くある。今後は、そういった実践や情報等を次年度以降に確実に引き継ぐための体制づくりを行っていく必要があると考える。

② 学力の底上げ

通過率ごとの児童割合については、大きな変化が見られていない。次年度以降も教員間での学び合いを通して更なる授業改善に努め、学習内容の確実な定着を図ったり、情報収集や整理分析、表現等の質を高めたりしていく必要があると考える。